

イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール氏講演録

イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール
武田千香訳

イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール (Itamar Vieira Junior) は、1979年にブラジルのバイーア州都サルヴァドールで生まれた、先住民とアフリカの黒人を先祖に持つ作家である。国立植民農地改革院での勤務経験をもとに小説『曲がった鋤 (Torto arado)』を執筆し、この作品は2018年にポルトガルのレヤ賞を受賞し、まずはポルトガルで出版された。ブラジルでは2019年に刊行されて高い評価を受け、2020年にブラジルの主要な文学賞であるジャブチ賞 (長編小説部門) とオセアーノス賞をダブル受賞した。

物語は、ブラジル北東部奥地の農場を舞台に、主人公の姉妹ビビアーナとベロニージャの家族を中心に展開する。農場は代々白人の不在地主が所有し、ほとんどが奴隷の子孫で、姉妹の家族も含め、いまだに奴隷同然に搾取されている。『曲がった鋤』は、1888年の奴隷制度廃止がいまだに未完の状態であることを告発すると同時に、その状態を打開すべく立ち上がる若い世代の姿も描く話題作である。

邦訳が2023年1月にブラジル独立200周年を記念して出版され、著者のヴィエイラ・ジュニオール氏も4月に来日した。本稿は、科研基盤研究 (C) 「ブラジルのマイノリティ文学における複合性：交差する人種・ジェンダー・クラス」 (研究代表者：武田千香) (21K00432) 事業の一環として、駐日ブラジル大使館と水声社との共催により、2023年4月13日 (木) に東京外国語大学で行なわれた講演の原稿の改訂版を日本語に翻訳したものである。

(武田千香)



『曲がった鋤』書影

過去を耕し、現在を刈りとる：脱植民地物語の視点

“彼女の体に憑きながら、過去は決して私たちを見捨てないと感じた”

この小説『曲がった鋤』を書いた理由を挙げれば、無数にあることはわかっていますが、もしひとつだけ選ばなければならないとしたら、私はこう言うと思います。私の目

的は、長いあいだ地方で勤務していたときに、農民たちが堂々と表わすのを見た大地への愛を文学に記録することだったと。大地はこの物語の主要な登場人物で、ほかのすべての登場人物の人生を宿命的に貫いています。なぜならまず、この物語がシャパーダ・ジアマンチーナという歴史的な大地、ブラジルの広大な拡がりの中で、ほとんど魔法のような場所を舞台にしているからです。この一帯は、ほかの多くの場所と同じように、ヨーロッパの植民地事業と奴隷制による無残な扱いを受け、私たちの現在を決定的に特徴づけました。それからもう一つは、私たちがビビアーナとベロニージアの声を通して、そして歴史的意識ともいえる精霊の声を通して、情景や人々や出来事を知ることになるからです。それはいわば、これらの人々が情感を込めて語る世界観、心がこもって初めて可能となるものなのです。

物語の冒頭から私たちは、自分たちが暮らす環境の歴史的なプロセスが私たちの身体を貫き、私たちの経験に影響を及ぼしていることを意識させられます。それは個人の体験でありながら集団的な体験でもある。私たちは個人と全体の共存に気づかされます。それは、遠い昔から出来事を貫いているものですが、いまも私たちが住む場所、就く仕事、社会階層に占める場を左右しかねないものです。

ビビアーナとベロニージアは、特定されていない系統の末裔ですが、——広大で多様なアフリカから連れてこられ——奴隷にされて植民地事業に奉仕させられました。でもその地球でもっとも原初的な住まい方が、1500年の昔に世界を変えはじめたヨーロッパの植民地的存在論に立ち向かい、彼女たちの身体の中で持ちこたえたのです。彼女たちには、ある気高さが認められます。それは、特異な世界の観方や理解の仕方から立ち上ってくるもので、それも植民地事業の均質化による「地ならし（平板化）」でも台頭しました。彼女たちはそれを使って、アグア・ネグラ農場での暮らしを語りますが、そこでは両親やほかのディアスポラの末裔たちが労働力を搾取され、人生経験を貶められています。奴隷制度はもう時代的には遠い出来事で、隣人や親戚のあいだでは話題にもなりません。でも、長期にわたって暴力的な出来事に貫かれて形成されてきた私たちの社会を理解するために、それは決定的な意味を持つように思えます。時間が経ったからこそ、歴史的な痕跡が私たちの身体に、私たちの軌跡に、遺伝的・先祖的コードの中に刻まれていることが理解できるようになるのです。そしてそれらは、私たちの意思とは裏腹に私たちを見放すことはしません。

ビビアーナとベロニージアの話には、大陸全体と、大航海時代に世界が経験した断絶の歴史が詰まっています。搾取と略奪のプロセスに始まり、先住民とアフリカ大陸の人々の従属的社会集団化という形で頂点に達し、略奪による新しい生き方を生み出した歴史です。この断絶は、自然を——人間と景観において——資源に変え、資本主義的蓄積のプロジェクトを育みました。それはまた世界での住まいの在り方も変容させ、前代未聞の規模で自然の搾取を招きました。カリブの思想家マルコム・フェルディナンドは、その時点で新しい住まいのパラダイム——植民地的住まい方——が確立されたと書いていますが、それは地政学的要因、自然の搾取、「他者性の死」という三つの柱を基盤としています。

こうして植民地化は、本国——ヨーロッパ——への依存を創りあげ、ブラジルという広大な従属的社会集団化された空間を生み出しました。ブラジルは旧世界のために富を産出

し、あらゆる意味で植民者の帝国に対し従属的地位にあり続けました。自然の集中的な搾取が——人間と人間以外も含めて——確立され、それは今日も続いています。そしてその終着が他者性の死、つまり共存の可能性の死で、搾取側でない人々の生命や権利への拒否が常態化しました。私たちは植民地化と奴隷制の残痕を生きており、それが何を意味するかを知っています。

私は長いあいだずっと気に懸かっていた疑問への答えを求め、芸術、とりわけ文学を涉猟してきました。自分の出自をより深く理解しはじめたとき、実はそれが意味で私の社会での立ち位置を決定していたわけですが、私は人を持続的に劣等な立場に置くプロセスを解明してくれる表象をみつける必要性を感じるようになりました。植民地支配に醸成され共通の秩序となったそのプロセスは、いまでも私たちの生を決定づけています。

こうして文学は、知識の強力な源となりました。読書を通じ、私は世界における自分の場所を理解させてくれる省察と想起に取り組みました。私の人生の物語は私のものですが、それは私の先達の人生や軌跡も深く染みこんでいます。サイディヤ・ハートマンは、次のように書いています。奴隷制度は——ここでは植民地化に先立つ先住民の大量虐殺も含めて考えられますが——命と価値の序列を生み出し、それは今なお解体される必要があると。多くの場所で、社会的不平等は同時に人種的なものになっています——なおこの人種という概念もしつこく残る植民地的構築物です。大多数の人の生は、従属的社会集団性という変わる事のない場所に運命づけられているように思えます。医療生態学では、環境と歴史は身体に健康に影響を及ぼすといえますので、従属的な立場にある人々の身体の脆弱性が、私たちを貫く歴史によって気がつかないうちに生産されたことは想像に難くありません。

この小説で語られる基本路線は、いまでも終わりが無いように思える歴史の刻印を生きる人々の人生と体験に基づいています。そうやって私は、耳に届く言葉の一つひとつに導かれるがまま身を任せましたが、それらの言葉は、聴く者に魔術的效果を呼び起こそうとして慎重に選ばれたように思えました。物語の選択もこうした日常的な影響と、完全に死に絶えてはいない先祖伝来の存在論から繰り出されたため、登場人物の人生の軌跡は川の蛇行と見分けがつかなくなり、身体は大地と音、そして風と雨が深く染みこむものとなりました。こうした拡がりのある動きの中で私たちは、ビビアーナとベロネージャ、そしてゼカ・シャペウ・グランジ〔二人の父親——訳者注〕とセヴェーロ〔夫——訳者注〕の人生の旅路を追うこととなります。もしかしたら、自分たちのとは劇的に違う生に入り込むべく身を任せることになるかもしれません。それでもそこにはすべての人に共通するなにかが秘められています。すなわち人間であるという普遍的な経験です。

歴史という土を掘り起こし、過去を“耕す”ことによって、私は植民地事業が男たちによって計画され、実行されたことを確認しました。つまりご想像のとおり、私たちの生は家父長的論理によって導かれてきたのです。それは、女性とその叡智を劣ったものとして定義しました。だから私は、彼女たち、ビビアーナとベロネージャに主役の座を返したのです。そうすることで植民地化によって隠蔽されてしまった家母長制的な中心的役割を回復するために参考となる言及や指標を掬い上げようとしたのです。私は、歴史をひとつの連続として理解しながら、先祖への言及や指標が詰まった物語を創りあげようと、想像の

翼を羽ばたかせました。何よりもまず大地は母であり、マルコム・フェルディナンドによれば、その役割は「受け容れ、養う」ことです。ただ単に搾取し、一部の少数の人だけが富むという植民地のイデオロギーとは大きく異なります。大地との家母長制的関係は、この小説に出てくる女性同士の関係にみられるように、多くの大陸の先住民社会のルールでした。シャルル・ロシュフォールは次のように思い起こさせてくれます。「彼らの言葉を借りると、大地は生命に必要なものはすべて提供してくれるよき母なのです」。先住民の母だった大地は、植民地支配者たちによって搾取される経済的資産になりました。保護者としての大地という概念は、資源としての大地という考え方に取って代わられました。でも、歴史的意識は、フェミニズムのパラダイムが一つの可能性であることを教えてくれます。「植民地化は、母を崇める大地から父を崇める土地への変化を意味した」とフェルディナンドは書いています。その前提にあるのは、植民地事業が男性によって構想され、創り出されたことです。女性の叡智や技や世界観は蔑ろにされ、それが植民地化された人々と環境の関係を変えてしまいました。ブラジルばかりでなく、大陸全体の歴史物語に再び女性を統合させることは、現行のモデルの社会関係への理解を拓けます。この現行モデルこそ転覆し抹消されなければなりません。

この意味で、登場人物たちは先人たちの足跡をたどっているように見えます。切断された舌、逃亡、結婚、労働、これらの只中でビビアーナとベロニージアは心の底から自由と尊厳を求めますが、それは先祖が求めたものとまったく同じです。彼女たちは、ポスト・ディアスポラ、ポスト奴隷制、ポスト植民地化の生における、ある「奇跡」という意識の擬人化です。人身売買が共同体や風景、身体、文化、叡智を破滅に追い込む一方で、アメリカで打ち立てられた文明は——そしていまもその歩みは続いています——非人間化という暴力的なプロセスを起点に、歴史／物語と道を再創造しました。

抵抗は、生き延びようとする者たちの実践、搾取という残虐性に屈することなく、農場や都会の作業場から逃亡し、森の只中、“植民地世界の外”で生き続けた人々の実践でした。フェルディナンドはこうも書いています。「世界を食い尽くすような植民地的住まい方に直面し、逃亡奴隷らは別の生き方と土地との関わり方を実践した」と。

植民地化と複数の奴隷制が「近代の中心で存続している」ことを認めたとき、奴隷制そのものの貧困と常に対峙する形で存在した奴隷制への一連の反抗が浮き彫りになります。生きるための世界を求める中で、昨日と今日の奴隷化された人々は、連帯を通じて植民地的住まいへの隷属に昔も今も抵抗しています。この政治的かつ実存的な抵抗の実践は、従属的社会集団性を覆すための道標であり続けています。かつて逃亡は搾取の世界から逃れる願望の結果でしたが、気候変動という非常事態に直面する今日、それは、我々が地球上より略奪的ではない住まいの在り方を回復できる実践となるかもしれません。

植民地事業が、他者性の死——すなわち異質なものととの共存の不可能性——の促進を試みたとすれば、文学は抵抗の道具となり、他者であること、すなわち異なった存在の性質と状況を理解するための実践を取り戻してくれるかもしれません。他者性ほど人間的なものにはほかにありません。そして読書はそのための強力な実践の源になり得るのです。読書をするたびに私たちは約束を交わし、その物語や出来事や人間の感情を読み解くあいだは、その物語の人生を生きることになります。それはまるで、読者一人ひとりが架空の劇場の

舞台に立ち、一人芝居でその他者の人生を演じ、その人の冒険や不幸を体験し、それまで考えたこともなかった状況や感情に対する答えを見つけるようなものです。文学は私たちに共感することや、人間の経験の中でもっとも深いものを伝えることを可能にしてくれます。実際には生きていない歴史上の時代、異なる文化や空間を再訪するとき、私たちはそれを生きるだけでなく、その筋書きに出てくる人々の主体性に入り込むことができます。しかも他者の主体性の体験に留まりません。その感情に到達しようと意図することで、私たちは自分自身も読み取ることができるのです。

『曲がった鋤』は、ある民族の身体と土地をめぐる旅とすべく書かれました。より大きな存在の可能性を取り戻すこと、遠い昔から私たちに伝えられ、今も私たちの暮らしで擽猛な叫び声を上げるドグマやパラダイムをはるかに超えるべく書かれました。私たちを浸食できる雨や風はありません。魔法もファンタジーもありません。あるのは現実そのもの、レジリエンスと抵抗の中で鍛え上げられた世界の捉え方、制度によって私たちが自己内面化したのとは異なる視点です。私たちは自分たちを取り巻く世界の上を歩くことを学び、破壊的状况を生きる暴力を理解します。私たちはまた、人間の不屈の精神を認めることも学びます。これは完全に降参することを拒むこと、死んでもそのたびに再生することです。なぜなら私たちは本当に強いのが生命であることを教わるからです。

「イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール氏講演会」
『曲がった鋤』——ブラジル文学にもたらされた新風——
A novidade de *Torto arado* na literatura brasileira

日時：2023年4月13日（木）12:40～14:10
場所：東京外国語大学 本部管理棟大会議室

登壇者：イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール

言語：ポルトガル語（日本語への通訳あり）

共催：東京外国語大学
科学研究費助成事業 基盤研究（C）
「ブラジルのマイノリティ文学における複合性：交差する人種・ジェンダー・クラス——」
(21K00432)
駐日ブラジル大使館
水声社

※講演録の作成には、講演のための通訳原稿も参考にした。

東京外国語大学+駐日ブラジル大使館連携事業
『曲がった鋤』邦訳出版記念来日

「イタマール・ヴィエイラ・ジュニオール氏講演会」

『曲がった鋤』 ブラジル文学にもたらされた新風

A novidade de *Torto arado* na literatura brasileira
現代のアフロブラジル作家が描き出す

『傷跡』の
物語

言語の喪失、
奴隷制の負の遺産、
血に塗れたナイフ、
すべてを知る精霊……



2020年にジャブチ文学
賞を受賞
ブラジルの20~21年の
ベストセラー
ブラジル文学に新風を起
こしたアフロブラジル文
学作品

翻訳：武田千香+江口佳子



イタマール・ヴィエイラ・
ジュニオール
Itamar Vieira Junior

4月13日 木 12:40~14:10

場所：東京外国語大学 本部管理棟大会議室

東京都府中市朝日町3-11-1 西武多摩川線多磨駅下車徒歩5分

言語：ポルトガル語（日本語への通訳あり）

共催：東京外国語大学
科学研究費助成事業 基盤研究(C)
「ブラジルのマイノリティ文学における複合性：
交差する人種・ジェンダー・クラス」(21K00432)
駐日ブラジル大使館
水声社

一般公開
事前申込不要

1979年、ブラジルのバ
イーア州都サルヴァドール
生まれ。バイーア連邦大学
にてアフリカ民族学で博士
号を取得。国立植民農地
改革院での勤務経験をも
とに小説『曲がった鋤』を
執筆し、2018年にポルト
ガルのレヤ賞を受賞し、18
年に出版。ブラジルでは
19年に刊行され、ジャブチ
賞とオセアノス賞を受賞。
そのほか短編集『日々』
(2012)、『死刑執行人の
祈り』(2017)など。

お問い合わせ先

武田千香
Palestra6030@tufs.ac.jp

BRASIL
駐日ブラジル大使館

IGR
Instituto Guimarães Rosa

150th
1873-2023
anniversary TUFs
東京外国語大学
建学150周年
記念事業